氏名（本籍）	竹澤栄祐（タケザワ エイスケ）（東京都）
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博音第32号
学位授与年月日	平成10年3月25日
学位論文等題目	〈演奏曲目〉J.S.バッハ：フルートと通奏低音のためのソナタ作品1034、1035他 〈論　文〉J.S.バッハの作品におけるフルートの用法と真純問題をめぐって
論文等審査委員	
（主査）	東京芸術大学　教授（音楽学部）　角倉一朗
（副査）	〃　〃（〃）　青山昌国
（〃）	〃　〃（〃）　村井祐児
（〃）	〃　助教授（〃）　小畑善昭

（論文内容の要旨）

J.S.バッハは様々な作品の中でフルートという楽器を用いたが、彼にとってこの楽器はどのような楽器であったのか。それをその用法から探ること、そしてBWV1020、1031、1033の3曲のフルート・ソナタに関する真純問題について、フルート奏者の立場から再考察することの大きく分けて2つの目的を持ったのが本論文である。対象となるのは、バッハのフルート・ソナタのみでなく、カンタータ等の声楽曲も含めた非常に多くのフルートが用いられた作品となる。

このような目的、対象を持つ本論文は次の3部構成から成る。それは、第1部「フラウト・トラヴェルソについて」、第2部「バッハとフラウト・トラヴェルソ」、そして第3部「フルート・ソナタの真純性」であり以下に各部の概要を記す。

第1部「フラウト・トラヴェルソについて」

バッハとフラウト・トラヴェルソの関係を見て行く前に、第1部ではバッハ時代のトラヴェルソとはいったいどのような楽器であったのか、その楽器自体に焦点を当てる。そのために、まずその発展の歴史をトラヴェルソの起源からバッハの時代まで見渡して行く。そして、具体的にバッハ時代のトラヴェルソの構造や特色を概観し、さらには近代フルートとの比較も行う。

次に、楽器自体だけでなくこの楽器のための作品にも目を向け、バッハ以前のトラヴェルソ作品の歴史と、バッハ時代の他の作曲家の作品を概観する。

第2部「バッハとフラウト・トラヴェルソ」

この第2部は本論文の根幹となる部分で、ここではバッハにおけるトラヴェルソの用法を様々

な観点から検証し明らかする。そのためには、バッハがこの楽器を用いた作品すべてにスポットを当て、それらをいろいろな角度から調べデータ・ベース化などする事により、できる限り客観的にバッハのトラヴェルソの使い方を観察する。その場合ただトラヴェルソを用いた作品のみを対象にするのではなく、他の楽器の使い方とも比較しトラヴェルソの場合だけの特徴を探り出す。そしてその結果、バッハはトラヴェルソに対してどのようなイメージを持っていたのかなどということを考察する。

さらに最後には、これらの研究の結果を踏まえて我々現代のフルート奏者はどのようにバッハのフルート作品に相対するべきか、また昨今の古楽ブームによりだんだんに明らかにされて来ているその時代の演奏法をどのように現代フルートの演奏に生かしたらよいかということを考える。

第3部「フルート・ソナタの真純性」

この第3部では、第2部で明らかにされたバッハにおけるフラウト・トラヴェルソの用法などから、BWV1020、1031、1033の疑惑の3曲のフルート・ソナタに対する真純問題について考える。その3曲を見てみる前に、まずバッハの他のフルート・ソナタについて概観し、さらに自筆譜の残されている2曲について様々な点から詳しく調べることによりバッハのフルート・ソナタの特徴を検証する。そして、この真純問題の先行研究を見た後、第2部での結論や筆者なりの考察から真純問題への結論を導き出す。

最後に、これらの研究の結果得られる結論についてである。まずバッハにおけるフルートの用法についてであるが、彼は1720年頃から晩年の47年まで約27年間、約78曲の中でこの楽器を用いているが、この楽器がどちらかというとソロの楽器として好んで用いられたことや、フルートをオブリガート楽器として用いている声楽曲のアリアなどの歌詞の内容には、「愛」「祈り」「祝賀・賛美」「喜び」といった4つの明るいイメージの内容が多く見られることから、バッハはこの楽器に対して主に明るく前向きなイメージを持っていたこと、またフルートが用いられた曲の調選択の傾向は、ロ短調とト長調の比率が非常に高く、それに対してヘ長調やハ長調は比率が低いことなどが挙げられる。次に3つのフルート・ソナタの真純問題についてであるが、「資料批判的方法」と「様式批判的方法」という違った角度から考察し、さらにこれらの結果を考え併せた結果、本論文での結論は3曲すべてが「偽作である」というものになった。